

国際的な組織作り

Kavli IPMU 機構長

村山 斉 むらやま・ひとし

私達のカブリIPMUの資金は、文部科学省の世界トップレベル研究拠点プログラム(WPI)からきていますが、その大事な目的の一つは日本の大学・研究所を国際化することです。これは一見不思議なことかもしれませんが、科学はそもそも世界共通のもので、研究者は国際会議や共同研究のために外国に行くのが当たり前です。これ以上一体何が必要なのでしょうか？

私は1993年にアメリカに引っ越しましたが、色々苦勞がありました。住むところを探し、国民年金番号を取得し、銀行口座を開き、クレジットカードを作り、車を買うなど、知っているやり方と全てが違いました。それでも研究者としてより良い可能性があるだろう、と移住を決めたのでした。そして私は大変幸運でした。素晴らしい人たち、感服する共同研究者、私の地平線を広げてくれる人、大事な友人、沢山の人の出会えました。でもここまで良い経験ができたのには、私が英語を話せたことがありました。

日本に移住することを考えると、言語のバリアで怖じ気づいてしまう人がいます。しかもアメリカで長く暮らしていると、ヨーロッパの人は結構会うことができますが、日本の人にはなかなか会いません。日本に行くことと孤立してしまう印象が生まれます。

WPIはこの印象を壊して、日本に来るバリアを下げるためにあります。Kavli IPMUにいと、アメリカやヨーロッパの主要研究所にいるのと全く変わりがない、とみんなに言われます。実際、毎年500人のビジターが外国から来ます。メンバーの一人一人が、1～3ヶ月間外国に行くことが「義務」です。参加している全てのプロジェクトが国際事業です。そしてリクル

ートのために声をかける人たちは、アメリカやヨーロッパよりもKavli IPMUでの可能性を求めています。しかし問題は生活と言語です。

ここでサポート・スタッフの登場です。三人の素晴らしいスタッフが外国人研究者のサポートのためにどんなに努力し、苦勞してきたか、今号で読むことができます。完璧ではないでしょう。ですが、研究者が到着次第すぐ研究に励めるように、日々努力しているスタッフの様子がよくわかります。しかも、うまく行っているのです！

その成功例の一人が、我らが准教授、今号の表紙を飾るシメオン・ヘラーマンです。彼はKavli IPMU発足後間もなく、プリンストンの高等研究所から移ってきました。そして私達が国際的で世界トップレベルの研究所以る証として有名な存在なのです。

